

## 気付く力を高め、よりよい音楽表現を追求する音楽科学習

### 1 音楽科における「一人一人が問いをもち追求する姿」

今日は、「待ちぼうけ」を歌いました。最初に、この詩を読んで、内容が暗そうだなと思いました。だから、どんな歌か雰囲気を予想する時は、想像が付きませんでした。だけど、曲を聴いてみたら伴奏や歌が明るくて、とても不思議に思いました。どうしてこんなにあべこべなのだろう。(児童A)

上記の文章は、小学5年「詩と音楽を味わおう」の「待ちぼうけ」に出会った時のふりかえりである。児童Aは、詩から感じ取った自分の思いと実際に楽曲を聴いた時のギャップから、「どうして?」という問いをもった。詩の内容を深く読み取ったこの子どもは、その後詩の様子が伝わるような歌い方を見付け、速さや表情などを工夫して歌う姿につながった。

また、次の文章は、中学3年「和太鼓アンサンブルを楽しもう～We love Wa-Daiko～」の題材の終わりでのふりかえりである。

私は、小学生の時からリズムを考えるのが苦手でしたが、今回の授業で身近にあるリズムを使えば(組み合わせれば)良いことが分かりました。身近なリズムと考えると、私たちの身の回りはリズムがあふれていると思いました。グループのメンバーでそれらを組み合わせたり、少し変えたりするだけでオリジナルのリズムが出来上がりました。(生徒B)

生徒Bは、リズム創作を行っているうちに「どうすればリズムがつくれるのだろうか?」という問いが自分自身の中に生まれた。そして、それを解決する糸口として身近なリズムに気づき、グループのメンバーと試行錯誤しながらそれらを組み合わせることで新たなリズムをつくっていった様子がうかがえる。

このように「どうして?」「どうすればいいのだろうか?」などと課題解決に向けて自分自身に問いかけることを出発点として、グループやペア、学級全体での学び合いの中で試行錯誤しながら解決に向かっていく姿がこれまでも多く見られた。

音楽科における「問いをもち姿」を考えたとき、「自己と対話する姿」「他者と対話する姿」「作品と対話する姿」の三つの姿があると考えられる。上述のように、自分自身に問いかける姿が「自己と対話する姿」であり、グループ等で他者と関わりながらお互いに思いや意図を伝え合う中で、「よりよい音楽表現にするために何をどうするか?」「どう表現を高めていくか?」などとお互いに問いかける姿が「他者と対話する姿」である。そして、音や音楽を聴いたり、演奏したり、楽譜を見たりする中で、音楽を形づくっている要素に対して、「この部分はどのようにしてスタッカートなのか?」「雰囲気の違いは、何がそうさせているのか?」などと作品に問いかける姿が「作品と対話する姿」である。この三つの姿のとらえをもとに、音楽科として求めるさらに具体的な「一人一人が問いをもち追求する姿」を次のようにまとめた。

#### <自己と対話する姿>

- 表現技能を身に付けようと繰り返し練習している姿
- よりよい音楽表現するために試行錯誤している姿
- 音楽を聴いて、そのよさを感じ取っている姿

#### <他者と対話する姿>

- 気付いたり、感じ取ったりした自分の思いを伝えようとしている姿
- よりよい音楽表現にするために他者と関わりながら試行錯誤している姿
- ＜作品と対話する姿＞
- 楽曲のもつ雰囲気と音楽を形づくっている要素を関連させて思考している姿

## 2 「一人一人が問いをもち追求する姿」を求めて

(2時間目) 今日は、割り箸でリズムを取る練習をしました。Dとラストのところが難しかったです。参考音源と周りの他の人のリズムを聴いて自信をもって叩けるようにしたいです。

(4時間目) 今日は、4小節間のリズム創作をしました。なかなかリズムが浮かびませんでした。次の時間にいろいろなリズムの組み合わせを考えてみようと思います。

(生徒C)

上記の文章は、中学3年「和太鼓アンサンブルを楽しもう～We love Wa-Daiko～」の毎時間終わりの生徒Cのふりかえりである。生徒Cは、短い文章ではあるが、その時間に自分が課題と感じたことを書き、さらに次の時間にその課題をどのようにして解決していくかということを書いている。生徒Cの「もっとこうなりたい」という切実な思いがあるからこそ生まれる追求する姿である。生徒Cは、その切実な思いから自発的にその時間の終わりに次の自分の取組を書いている。

このように、「次もっとこんなふうになりたい、してみたい」など、1で述べた三つの姿が表出するために、積極的に解決への意欲が高まるようなふりかえりをするを意図的に設定するとよいのではないだろうか。

また、一人一人が問いをもつということは、一人一人の題材に対する興味関心が高く、しっかりと授業に向き合っていないと達成できないことである。そこで、これまで取り組んできたように楽曲との出会わせ方や音楽を形づくっている要素の焦点化、子どもたち同士の言葉をつなげていく言葉かけなどの教師のはたらきかけを大切にしたい。さらには、子どもが一人で表現したり、一人一人が思ったことを伝えたりする場面の設定が必要ではないだろうか。一人で表現するというのは、必ずしも1対大勢ではなく、グループやペアの中で1対1という場面で表現することも想定する。個→グループ(ペア)→学級全体の学び合いで高まっていった音楽表現を、最終的には個に戻すことが大切であるからである。

一人で表現することは、精神的なハードルを越えなければできなく、大変難しいことである。しかし逆にとらえれば、「こんなふうに歌いたい」などの思いが強いからこそ一人で表現できる。上手下手ということではなく、幼小中11年間で一人一人の思いや表現の表出を認める支持的な雰囲気を大切に、育てていくことも大切なことと考える。

以上のことを踏まえて、音楽科として「一人一人が問いを追求する姿」につなげるための手立てを次のようにまとめた。

- 題材のねらいに即した音楽を形づくっている要素に焦点をあてた授業展開を構想する。
- 子どもの感じ方や表現を認める教師の姿勢と、子どもたち同士の言葉をつなげていく教師の言葉かけを大切にしていく。
- 一人一人が思いや表現を表出する場面を積極的に設定する。
- 次時の個のめあてを設定できるようなふりかえりの工夫をする。

(文責 小村 聡)